



今日は「春分」。太陽は真東から昇り真西に沈む。昼と夜の時間は12時間のはずだが、実際は昼間の時間が10分弱長い。主な理由は二つ。日の出・入りの時刻は「太陽が地平線に顔を出す、入りは沈む時」と定義されているから、太陽が全部沈む分だけ余計に時間がかかる。もう一つは太陽が地平線近くにある時は、大気の屈折率の影響で浮かんで見えることである。すなわち天文の時刻より早く太陽の顔が見え始め、西に沈んでいるのにまだ見えることである。ちょうど斜めから見ると茶わんの底が浮かんで見

2016.3.20



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

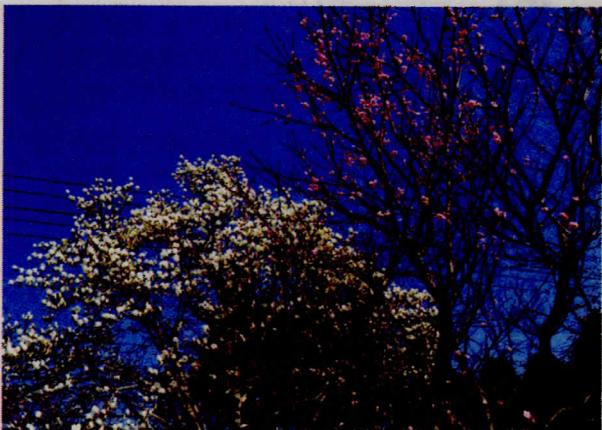
暑さ寒さも彼岸まで

えるのと同じ理屈だ。

太陽は、春分を境にこれから夏至に向かって、より北東から昇って、より北西に沈み、またより高く天を巡るので日脚も伸びていく。したがって北半球に注がれる太陽エネルギーも増加し、大陸も海も暖まる。季節は春本番へと進み、寒さが和らぎ、ポカポカ陽気にも恵まれてくる。彼岸は春分を挟む1週間。「暑さ寒さも彼岸まで」は気象学的にも根拠があるが、つらい苦勞に耐えた人々が迎える春にも通じる。

桜のつぼみが膨らみ、開花が秒読みの段階にある。しかし、この時期はまだ寒暖の差が大きいため、ひとたび発達した低気圧がやってくると、花に嵐や花冷えとなりかねない。また、晴れた日の翌朝は放射冷却の影響で地表が冷え、霜も降りる。要注意だ。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



「花に三春の約あり」ということわざがある。春が来ると花々は、まるで前もって互いに約束をしていたかのように、一斉に芽吹き、咲き始めるという意味だ。

今年も散歩道の桜が咲きそうだ。モクレンが白い花をいっぱいにつけ、名残の梅がピンクを添えている。我が菜園の傍らにはツクシが顔を出し、スイセンが黄色の花をつけている。

三春は初春・仲春・晩春の総称で、3、4、5月を指す。ちなみに冬から春への道のりを、

2016.3.27



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

三春の約束

水戸での月平均気温(平年値)で見ると、1月は3.0度、2月は3.6度、3月は6.7度、4月は12.0度、5月は16.4度で、3月から4月にかけての上昇が著しい。また1カ月の降水量を見ると、2月は約60^{mm}だが、3月と4月は一挙に100^{mm}を超える。

この暖かさと慈雨こそが、三春の約の原動力なのだ。三春は日本列島が温帯地方に位置し、四季があることの恩恵である。もしずっと南に位置していれば常夏に、逆に北にあれば年中肌寒い季節となり、三春の約は果たせない。

他方、社会を見れば、三春は人々が学びやを去り、新しい出会いの時でもある。

花の命は短い。「明日ありと思う心の仇桜 夜半に嵐の吹かぬものかは」の歌もある。毎日を大切にしたいものだ。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)